

岩手県山田町田ノ浜における寛政津波の調査

今村 文彦*, 永野 修美*, 富澤 大*

1. はじめに

三陸で起きた津波と言えば、明治29年、昭和8年三陸大津波の規模が大きく、記憶も新しい。しかし、明治以前にも数多くの津波が発生し、三陸沿岸に来襲したと言う記録がある〔山田町、1982〕。例えば、梅内祐訓「聞老遺事」、児島大梅「梅荘見聞録」、菊地悟郎「南部史要」などに当時の津波の被害状況などが残されている。さらに、山宗宗真「明治29年三陸大津波調査報告」が最近翻刻され、その中に寛政5年の山田町田ノ浜での津波に関して、三百尺もの坂を越えてきたという遺言が記述されている。今までの史料には、寛政津波がこれ程の大きい波高であったという記録はない。本文は、この津波の記述に関して、現地調査を行いその結果を報告するものである。

2. 寛政5年津波の概要

理科年表や地震学の文献〔宇津(1987)〕によると、寛政5年1月7日昼過ぎ(1793年2月17日12時ごろ)宮城沖で発生した地震により、仙台藩で1,060戸が壊れ、12人の死者があったとされる。また、同時に津波が発生し、両石浦で波高4-5m、流出家屋71〔16-17または58, 83〕、流死9〔12-14, 34〕、綾里浦で70から80軒、気仙沼浦で300余軒、小瀬島(石巻市)で40余軒流失、箱崎浦で流死2。東北地方から関東地方にかけて多数の余震を感じたとある。

寛政津波については「梅荘見聞録」にも次のように述べられている。

「寛政五丑年正月七日巳の刻大地震二、三回アリ、大津波珊瑚島ノ上ヲ越シ、町内下側裏通り垣根迄来リ、上側ニハ変ナシ、向川原ノ板敷床上へ迄指水揚、須賀通ハ大変ノ由、両石村ニ於テ人家十六、七軒流出、溺死十二、三人モ之レアリ、潰家モ数軒之レアリ、其跡ハ河原ノ如クナリシト、地震ハ毎日毎夜二回モ三回モ之レアリ、指水モ七日斗ノ間ハ押来リ、南北共海岸住居ノ者ハ近山ニ移リ日夜入日斗リノ間家ニ帰リ来ラザル由、地震ハ二、三月頃迄ハ大小ノ地震毎日折々之アリ」

また、「古実伝書記」によれば、

「寛政五癸丑正月七日昼八ツ時大地震三度仕候而間少し過候否小津波三、四度参候而大にさわざ、山に懸上り申候得共、藤原、そけいは浪よけいは上げ不申候、宮古へも上げ不申、川筋斗おし申候而一円そんじ無之浦通は宮古迄浪おしよけいに御座候得共一切痛無之且後二月中迄全日全夜小地震仕、心支罷有申候、宮古、藤原村に而は山々に小屋相懸申候右小屋場所は船ヶ淵にかくまんへ相懸申候(中略)大槌領の内両石浦家八拾三軒流人三拾四人、男女子供に而死申候」とあり、両石において被害が非常に大きかったことが分かる。

羽鳥(1987)は武者の地震史料〔羽鳥(1975)、(1976)〕に新収地震史料〔東大地震研究所編(1984)〕を加えて、表-1のように各地での津波記録の概要を示している。山田・大槌のように浸水域を示す記述がある場所もあるが、大部分では浸水高を示すような具体的な記事はなく、各集落の地盤高を踏まえ

*東北大学大学院工学研究科

た津波の被害状況から、平均海面を基準とする津波の高さを推定している。この表から両石・綾里および牡鹿半島の鮫ノ浦・小沢で家屋の被害が多くあり、三陸南部において津波の規模の大きかったことが分かる。一方、今回注目している田ノ浜では「低地に浸水し、納屋場所痛む」程度で津波高は小さかったとされているが、「百浜で死者多数」という記述もあり、実際の被害はかなりのものであったのではと考えられる。

3. 山奈宗真の史料

明治29年三陸大津波の被害状況を山奈宗真が自ら調査した「岩手懸沿岸大海嘯取調書」[卯花, 太田(1988)]の陸前国閉伊郡船越村での津波の歴史において、

「右ハ 山崎勘六ノ祖母 明治十三年ニ病死
當時 九十六才 祖母遺言ニ

正月七日(凡 百四十年前 寛政五年正月七日ナラン)ノ津浪 百濱ヨリ(寄り濱ノ田ノ濱ノ■■濱ナリ)浪越ヘタリト云 凡 三百尺モ高キ坂ヲ越シ 凡 直径二十丁モアル所

田ノ濱ノ東ニ當ル地名(ヲトッコ)凹ナル所ヲ越エテ 油ッコ淵ニ 流入 當時 油ッコ淵ニテ人 多ク 死亡セント云 (當時ノ津浪ニ 油目魚 打上居リタルヨリ名称シ 山中ノ谷ナリ) 右ノ 寄濱ヨリ田濱 及「ヲトッコ」ヲ経テ 油目淵ニ至ル 凡 沓里前ニ云 二十町適当ナラン」

と、田ノ浜での寛政津波に関して記している。

さらに、「三陸大海嘯岩手懸沿岸見聞録一斑」にも、図-1の下に次のように記述されている。

「昔大海嘯ノ節寄濱ヨリ油目沢マテ浪打越油目居ルヲ見テ油目淵トモ云凡寄濱ヨリ油目沢迄沓里三拾丁計リ」

このように、寄り浜より津波が三百尺(約60m)もの高さの坂を越え、田ノ浜地区に流入して油目沢に至ったことを述べている。この記述が事実であれば、60m以上の打ち上げ

高が生じたことになり、表-1に示された羽鳥(1987)の津波記録と対比すると違いが大きい。

4. 津波調査の結果

図-2に現在の田ノ浜地区周辺、図-3に田ノ浜地区での都市計画図(1/10000と1/2500)を示す。また、写真-1には八幡宮から見た様子を示す。昭和8年三陸大津波の被災後、同地区の多くは海拔13m以上の区画整備された場所に高地移転している。まず、山崎氏の遺言の中にある地名が現在存在するか、また現在のどの場所に相当するかを調べた。

(1) 寄り浜

この浜(写真-2)は図-2、に示されているように船越半島の南部に位置し、幅約200mでU字型に奥まり、周辺は急峻な断崖である。したがって、津波エネルギーは集中しやすく、湾口も寛政津波の波源の方向に向かっている。寄り浜という地名は「昔、船がここに寄った」ことから由来するらしい[金浜宏氏(56才)]。ここには幾度か津波が押し寄せており、写真-3にある沢を打ち上がって津波は侵入していったらしい。この沢の奥には図-2、3で示された寄り浜坂(写真-4)がある。現在は、国民宿舎タブの木荘に通じる道路の一部である。田ノ浜地区で、この寄り浜坂を越えた津波についての言い伝えは、他の地区から移転してきたものを除き、かなりの住民が記憶しており、現在もこの言い伝えは残っている[佐々木瑞英氏(42才, 瑞然寺住職), 坂本正一氏(89才, 元船越村村長)]。

(2) 油目沢

寄り浜に比べて、油目沢の存在を知る人は少なかったが、この沢の名前の由来は、宗真の記述通りに、津波により油目(アブラメ、

アイナメ)が打ち上げられたことによると確認した[花坂チヨさん(67才)]。ただし、この津波が寛政5年のものであるかどうかは不明である。写真-5は沢の入口の早坂地区から撮影したものである。田ノ浜から小谷島に至る経路は3つあり、油目沢はその中の1つに位置する。図-2に油目沢の位置を示し、他の経路も点線で表している。これらは、「牛転し」と呼ばれる峠(写真-6)で1つに交わり、小谷島へ通じる(写真-7)。図より寄り浜坂を越えた津波が油目沢に至ることは考えられず、油目沢の方向に至ったということであろう。

(3) その他

遺言の中には「百浜」「ヲトッコ」などの地名があるが、これらについては位置を確認することは出来なかった。ただし、遺言の内容から「百浜」は寄り浜の一部かその周辺にあり、「ヲトッコ」は田ノ浜地区の東側にあり、図-3に示す場所ではないかと推定される。

「山崎勘六」氏については、同地区に孫にあたる山崎正十郎氏(67才)が生存していることが分かった。

5. おわりに

寄り浜より坂を越え田ノ浜に流入した津波に関する宗真の記述について調査した。その結果、この記述に重要な場所である寄り浜・油目沢などの位置を確認することが出来た。ただし、遺言にある油目沢は図-3に示される場所ではなく、山之神の下方付近(図-3中のA)ではないかと推定される。なぜなら、寄り浜坂から流下した津波が標高が60m以上もある山之神を直接越える可能性は小さいこと、さらに、油目沢で多数の死者があったという記述からその周辺には民家が何軒かあったのではないかとという点からである。

今回の調査で寄り浜坂を越えた津波に関して何点かは確認できたが、それが寛政5年の

ものであったという証拠を得ることはできなかった。さらに史料の調査を進めるとともに、寄り浜で局所的に波高が増加する可能性および原因について考察する必要がある。

参 考 文 献

- 卯花政孝, 太田敬夫(1988): 明治29年6月15日三陸沿岸大海嘯被害調査記録-山奈宗真一, 東北大学工学部津波防災実験所研究報告第5号, pp.57-379.
- 宇津徳治(1987): 地震の辞典, 朝倉書店, p.292.
- 羽島徳太郎(1975): 三陸沖歴史津波の規模と推定波源域, 東大地震研究所彙報, vol.50, pp.397-414.
- 羽島徳太郎(1976): 三陸沖津波の波源位置と伝播の様相, 東大地震研究所彙報, vol.51, pp.197-207.
- 羽島徳太郎(1987): 寛政5年(1793年)宮城沖地震における震度・津波分布, 東大地震研究所彙報, vol.62, pp.297-309.
- 山田町(1982): 明治以前の津波, 山田町津波誌, pp.15-24.

謝辞: 本調査では、東北大学工学部 首藤伸夫教授の御指導を仰ぎました。また、本調査を実施する際、山田町役場から都市計画図を送って頂き、山奈宗真の史料に関しては、東北大学工学部 卯花政孝氏、(財)建設工学研究振興会 太田敬夫氏に協力頂きました。ここに記して感謝の意を表します。

表一 寛政5年宮城沖地震における各地の津波記録および津波の高さ(推定値) [羽鳥(1987)]

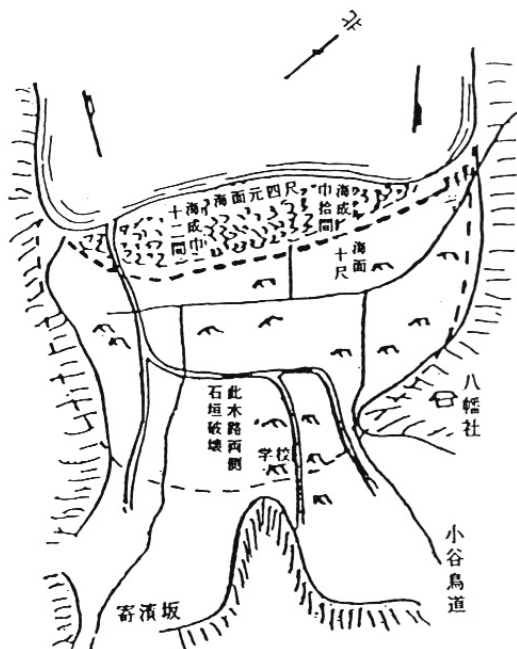
地名	記事	津波の高さ(m)
青森県		
八戸	湊で水死者あり, 荒津村内で波にとられ死者を出す。	1~2
岩手県		
鎌ヶ崎(宮古)*	沖ノ釜のふたまで潮引く。	
宮古*	昼八つ時大地震3度, 少し過ぎて川へ津波3~4回。 傷みなし(B.M.3.1m)。	2
藤原・磯鷄*	浪よけの上に潮あがらず。	2
大沢*	流船2。	2
飯岡*	流船2。	2
山田	川口通り浸水, 南町笹屋の前まで, 北は沢田の前川原まで潮先上がる。流船2。	3~4
織笠	川原に津波上がり, 川通りの家浸水して痛む。流船2。	3
大浦	差しさわりなし。	2
田ノ浜	低地に浸水し, 納屋場所痛む。百浜では死者多数。	3~4
越船	流船2, 流網1。	3
吉里吉里*	海岸通り破損。御官所門前まで津波上がる。流船2。	3
大槌	珊瑚島のうえを越し町内へ流れこみ, 裏通り垣根まで来る。上側には変わりなく, 向川原で床上浸水, 須賀通り大変, 流家1, 全壊2, 破船5(B.M.1.6M)。	3
片岸*	海岸通り破損, 流網1, 納屋1(B.M.1.7m)。	3
箱崎*	海岸通り破損, 水死2。	3
両石	流失・全壊71, 半壊9, 流船19, 水死9, 川原のようになる(海岸付近の地盤高2.3m)。	4~5
水海	流家14, 塩釜流亡, 船のこらず流される。7日間ぐらい潮の差し引きあり。	4
釜石	海岸通り破損, 流船2, 破船5(B.M.4.2m)。	3
平田*	流船2。	3
綾里*	70~80軒流失。	5
大船渡	茶屋前へ9尺津波打上がる(海岸付近の地盤高1.5m)。	3
長部	港に津波上がる。安政3年(1856)津波より5寸高い。	3
宮城県		
気仙沼*	300軒余流失(B.M.1.1m)	3~4
雄勝	床上浸水2尺, 安政3年(1856)津波より1尺ほど低い。	3
出島*	所々痛みあり。	2
鮫ノ浦*	10軒ほど流失。	5
小湊*	40軒ほど流失。	4
東宮・代ヶ崎	少々損。	2
松ヶ浜*		
福島県		
原釜*	海水200間ほど引く, 陸上に上がったが流家なし(B.M.4.0m)。	4
松川浦*	塩田損じ難儀する。	1~1.5
相馬磯部*	海水200間引く。	3
蒲庭*	海水500~600間引く。船が転覆して8人水死。	3
諸戸*	津波で家を損じたが怪我人なし。	3
下川(小名浜)*	何年にもないほど海水引く。	
小浜*	地震後俄に津波来たり, 海草をとっていた3人流死。	2

*新史料

陸中国東閉伊郡船越村字田ノ濱

○流亡戸数
○流亡納屋
○浪納屋
○死亡人口

油目沢



----- 明治29年の浸水域
----- 防潮林設置が望ましい場所

○負傷人口
○海面ヨリ高低
○満干潮ノ差
○打上浪
○浪走り
百三拾四尺
百八拾四尺

○此印ノ所黒松
拾三本在リ此様
ハ防風林ニ適ス
溺死者特多クア
リ田ノ濱ニハ二
百年前ノ樹所々
アリ
昔大海ノ節寄
濱ヨリ油目沢マ
テ浪打越油目居
ルヲ見テ油目居
トモ云凡寄浜ヨ
リ油目沢迄甲
三拾丁計リ越上
田ノ濱ハ舟越上
合併舟越部所へ移
シト云

図一 陸中国東閉伊郡船越村字田ノ濱での明治29年三陸大津波の状況 [卯花, 太田(1988)]

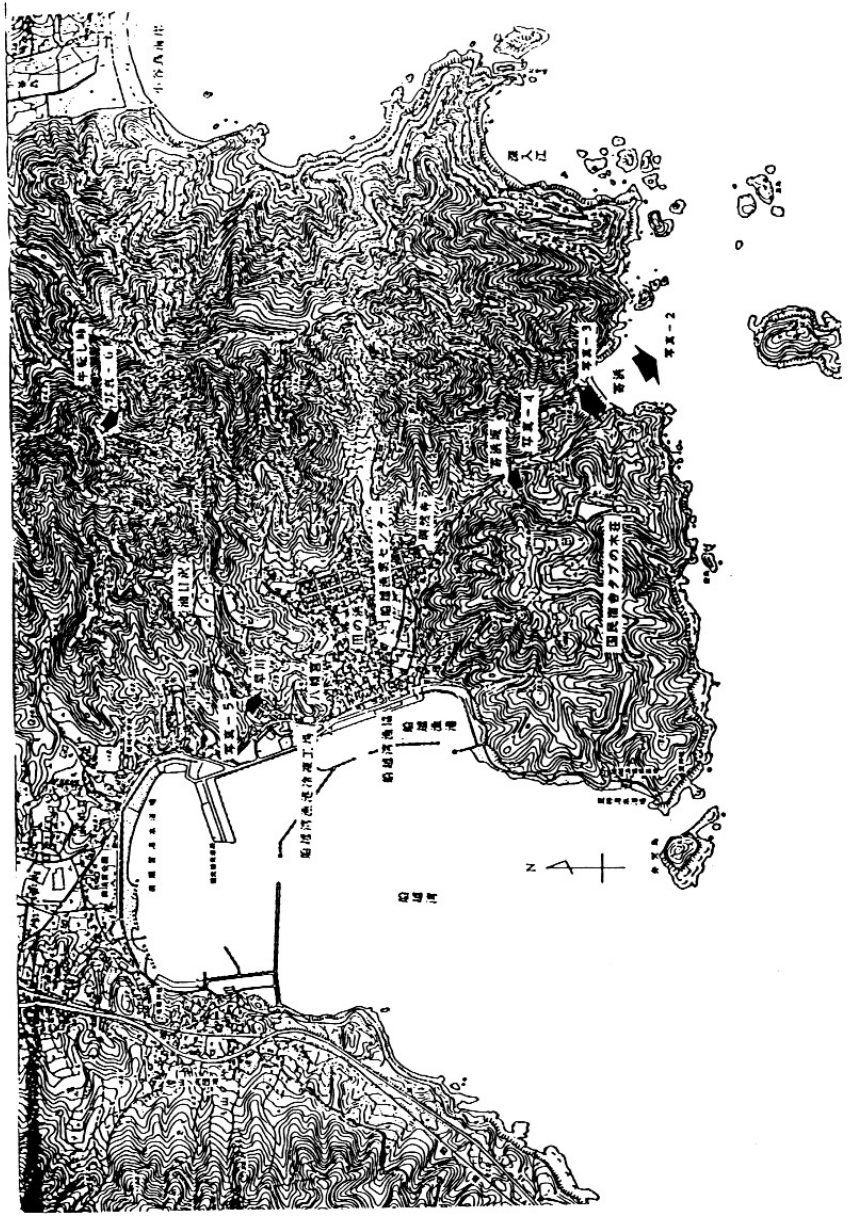


図-2 田ノ浜地区周辺での都市計画図（1万分の1を利用）

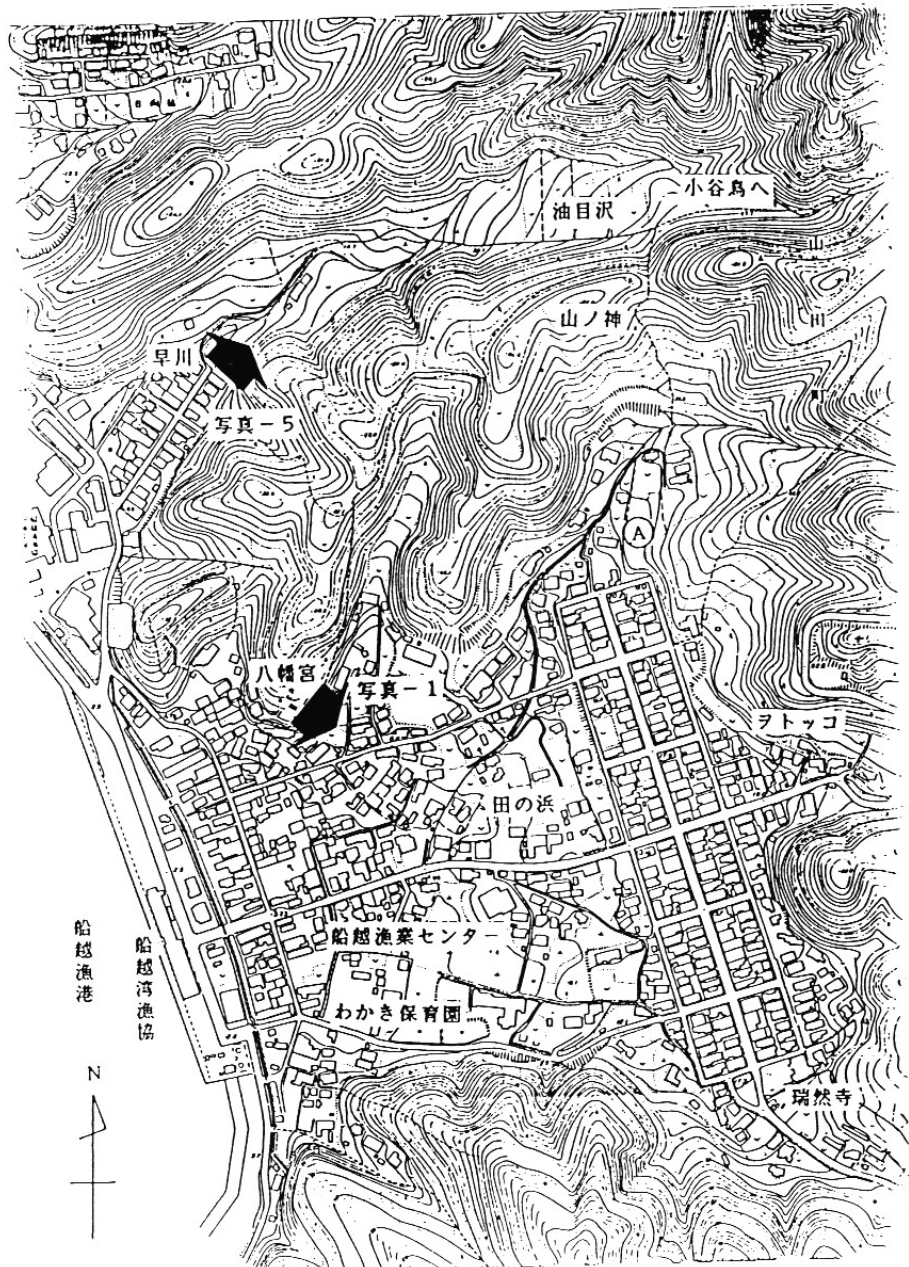
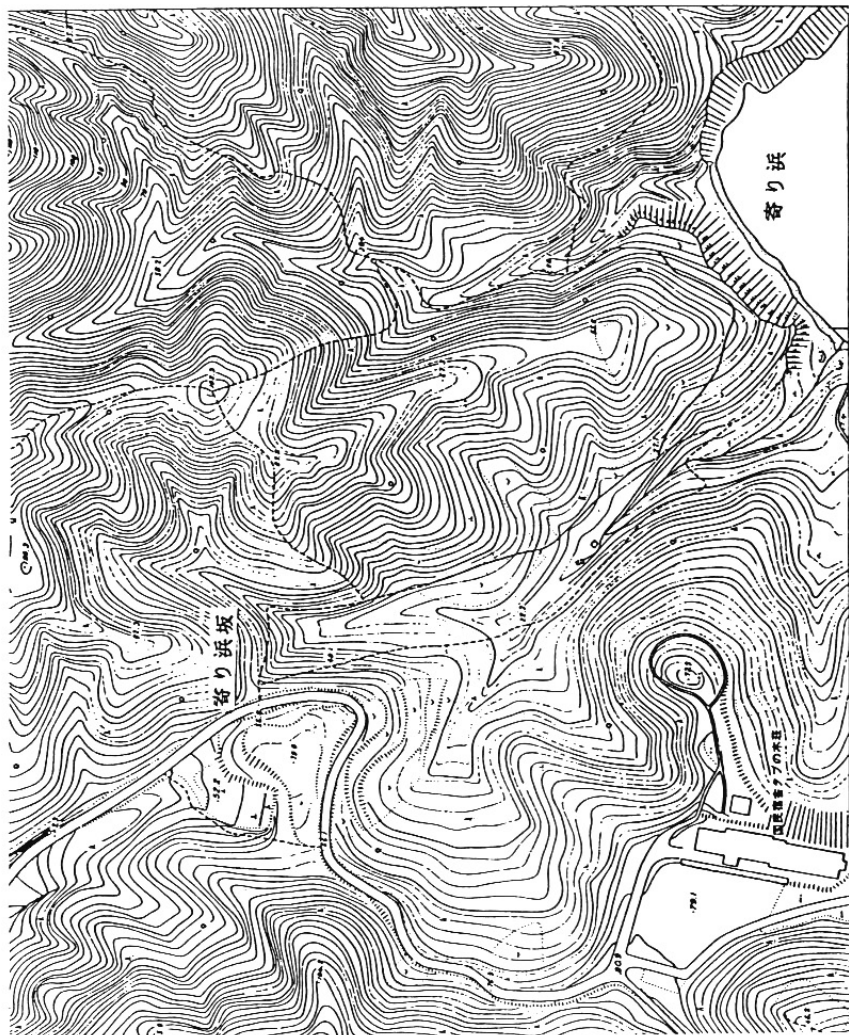


図-3 田ノ浜地区での都市計画図 (2千5百分の1を利用)



図一4 奇浜周辺地図

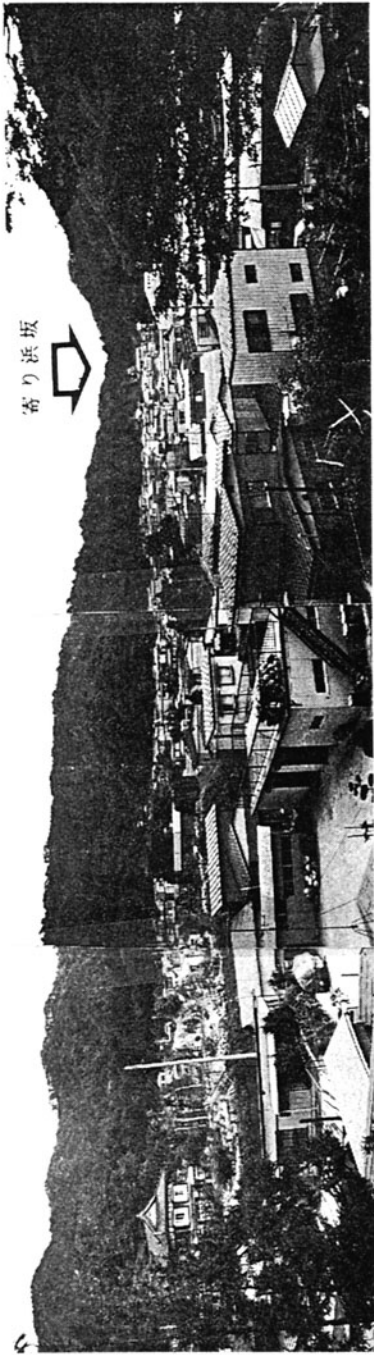


写真1 八幡宮から眺めた田ノ浜地区
矢印は寄り浜坂の方向を示す。

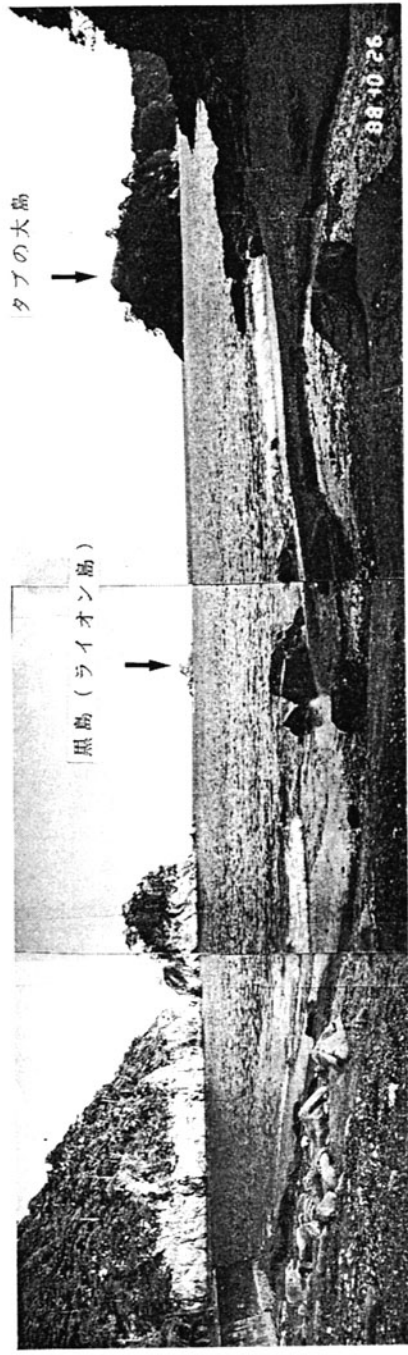


写真2 寄り浜(1) 船越半島の南部に位置し、直接太平洋に面している。



写真3 寄り浜(2) この沢を登ると寄り浜坂がある。

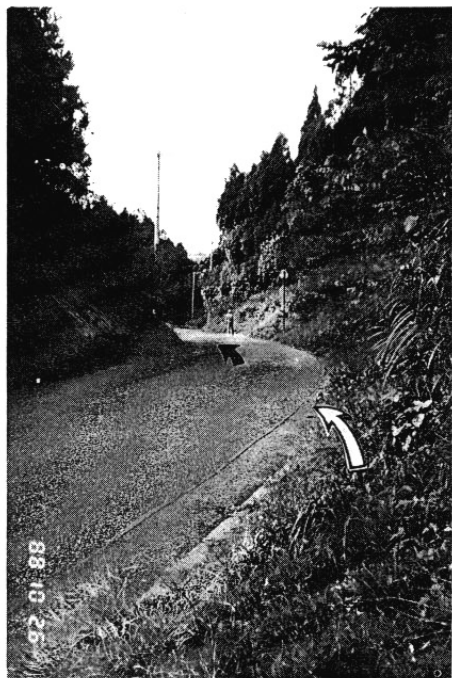


写真4 寄り浜坂 浜からの津波は白矢印の方向から、この坂を越えて田ノ浜へ向かった。



写真5 早川地区から見た油目沢



写真6 牛転し峠 この峠から船越湾を眺めたもの。



写真7 小谷鳥から見た牛転し
現在の地図によると、この沢はウシコロビ沢となっている。